

# 反逆の勇者と道具袋 8

# 主な登場人物

MAIN CHARACTERS

## シンイチ

本編の主人公。18歳。  
なんでも収納できる不思議な  
道具袋を唯一扱える「勇者」。

## キョエイヒロマサ 居永弘雅

全能神ゼウスの分身。56歳。  
「人神」たちを束ねるリーダー。  
「神」を敵対視している。

## シンタク デューク・神宅

予知神プロメテウスの分身。  
26歳。現実世界で、  
あるシステムを作り続けている。

## メアリー

前魔王の力を受け継ぐ  
大魔術師にして、  
ヒノモト国の大將軍。16歳。  
シンイチの正妻。

## ゴウ ガマサヒト 甲賀正仁

炎と鍛冶の神ヘパイトスの分身。  
17歳。晴美に振られ、ストーカー  
になった。

## ドンコイ

カストール侯爵家長男。30歳。  
フリージア王国では有名な放蕩者。  
真の姿は優秀で慈悲深い変態。

## アンリ

犬族の女の子。12歳。  
シンイチに助けられた  
元奴隷。シンイチを  
兄のように慕う。

## スガイ ハルミ 菅井晴美

シンイチの妹。17歳。  
元・大人気アイドル。  
とある事情でブラコン気味。

## 目次

### 本編

7

反逆の勇者と道具袋外伝「ドンコイ濁生記」  
（バツジ売りの少女とはだかの貴族様）



## シルフワールド——ヒノモト城

仮想世界「シルフワールド」は混乱状態に陥っていた。

突如として現れた『人神』<sup>ひとがみ</sup>という謎の集団が、プレイヤーのパートナーであるシルフOSを次々と洗脳し、仮想世界を蹂躪<sup>じゅうりんとん</sup>したためである。また、この世界の創造主、シルフまで彼らに捕らえられてしまい、シルフワールドの覇権は『人神』に握られてしまった。

シルフを失い、窮地に立たされたシンイチたちであったが、今まさに反転攻勢に打って出ようとしていた。

シルフワールドのヒノモト城の屋上に、勇者シンイチと魔王のメアリー、そしてメアリーのパートナーシルフOSのセレントが集っている。

ちなみに、シンイチとメアリーの格好はシルフワールド仕様で、シンイチはおでこに「勇者」と書かれた全身タイツ、メアリーは真っ黒いローブといった装いだ。

そんな彼らの目の前にあるのは、メアリーが激闘の末に倒した『人神』の音湖達子<sup>ねこたちこ</sup>の棺桶。その中にドンコイが入り込み、達子に迫りながら『人神』たちがシルフワールドに侵攻してきた目的を

聞いただしている最中であつた。

中から、女性のすすり泣きが聞こえている。

「も、もう勘弁して……ここから出して……」

「ぐふふ。まだまだ」

なにやらドンコイが不埒ふちやうなことをしているらしい。シンイチがあわてて声をかける。

「えっと、音湖達子さんですか？　いろいろ聞きたいことがあるんですけど……」

「何でも言うことを聞きます。だからここから出して！」

達子の心は完全に折れていた。

「では、質問に答えてください。なぜ貴方たちは、突然俺たちを攻撃してきたんですか？」

「わ、私にもよくわからないのですが、成り行きというか……」

そう言つて達子は、戸惑いながらも今までの経緯を説明していった。

ひと通り聞き終えたシンイチが渋い顔をしている。

「……なるほど。現実世界で神を名乗る者たちは、このシルフワールドの存在が気に入らなかつた。そこで、貴方たち『人神』を刺客として差し向けてきた。そういうことですか」

「そ、そうです。現実世界を創つたと言われるエリシオンの神々は、たかが人間ごときが神の真似事をして世界を創造したことが気に入らなかつたのです……。私も神から依頼を受けて、シルフワールド侵攻に参加しました。だって……そうでもないかと、元の人間の姿に戻してもらえず、現

実世界に居場所がなくなつてしまふんですもの！」

棺桶の中から、達子の泣き叫ぶ声が聞こえてくる。

「むふふ。別に今の姿でも十分に美しいですよ。美熟女という言葉ですか。モミモミ」

「ひっ！　やめて！　男なんか嫌い！　私は美少女が好きなの！　神になつて、たくさんの美少女をはべらすのが夢なんだから！」

太った醜男みにくおとこのドンコイに抱きつかれて失神寸前の達子は、自らの性癖を大声で叫んでいた。

そんな達子に呆れながら、シンイチが淡々と告げる。

「たとえシルフワールドを潰しても、どうせ同じようなことをする人が出てきますよ。世界中の人が、人間の手で世界を創ることが可能だと知ってしまったんですから」

「……きつと、神々も何度でも同じことを繰り返すでしょうね。それは人間が諦めるまで続くと思います。そして最後には、神々が人間に天罰を下すかもしれません」

「天罰とは、このようなことですか。ホレ」

「な!?　そこはダメ！　もうやめて！　ここから出して」

相変わらずドンコイは達子を責め続けているらしい。シンイチは、彼女のことをだんだん可哀相になつてきた。

「わかりました。出してあげましょう。でも、もし逆らつたら……」

「もう逆らいません。何でも言うことを聞きますから！」

達子が完全に屈服していることを確認すると、シンイチは棺桶を開けてあげた。

中から、泣きはらした達子とドンコイが出てくる。ドンコイはどこかすっきりした様子である。

「ぐすつ。うう……。心も体も汚されちゃった……」

「もうお終いですか？　なんなら一晩くらい一緒にいてもよかったのですが……」

泣きべそをかいている達子の横で、ドンコイは愉快そうに笑っている。

「そ、それは可哀相ですよ。さて、達子さん。貴女はこの世界の不正侵入者です。速やかに元の世界に戻ってください」

シンイチが厳しい表情で通告すると、達子は泣きながら首を振った。

「そんなこと、あなたに言われずとも何度も試したわよ！　暗くて臭い棺桶から脱出するために口グアウトしようとしたけど、できなかったの。……あの男が世界の設定を変えたのよ！」

「ん？　あの男？」

「居永弘雅<sup>きよながひろまさ</sup>。大神ゼウスの分身を名乗る、私たち『人神』のリーダーで、得体の知れない男よ。あいつは人間やシルφοςを洗脳することができるの」

追いつめられた達子は、自分たちのリーダーの正体をあっさり和白状した。

「なるほどね。ところでドンコイさん。棺桶の中で、彼女たちのことをいろいろ聞き出していただけましたか？」

「ええ。彼らが何者であるかといったことから、本拠地の位置までバッチリですぞ」

自らの成果を誇るように胸を張るつもりが、ドデンとお腹が突き出し、ちょっと間抜けな感じになっているドンコイ。

「では、もう大体のことはわかったので、貴女には即刻退去してもらいますね」

そう言うと、シンイチはいきなり達子の胸を『裁きの剣』で突き刺した。

「ぐっ！　痛い！　刺すなんて酷い！　あああゝ」

突然のことに達子はパニックになっている。

「ちよつと！　シンイチ何してんの!？」

シンイチの行動にドン引きしたメアリーが責めるように尋ねる。

「大丈夫大丈夫。こうするためにこの剣を用意したんだから。いわばこれは、現実世界に帰るためのリセットボタン。ゲームの世界から出られなくなる設定の物語はネットにありふれているからね。その対応策として作っておいたものなんだ。この剣に刺されて殺されれば、元の世界に戻るようになる」

「でも、なんか……苦しんでいるような……」

メアリーはもだえ苦しむ達子を見て、顔をしかめている。

「まあ、リアルな感じを出すために痛みも設定しておいたんだけど、一瞬だけだから我慢してもらおう。それにシルフを取り戻すことができたなら、そんなことしなくても元の世界に戻るしね。それじゃ、仕事に取りかかることにしよう。この城にいる俺たち以外の人間を収納！」



シンイチが床に手をつけて念じると、城内の人間たちが一瞬にして道具袋に吸い込まれて消えた。それを確認すると、シンイチは剣を掲げて告げる。

「みんなまとめて、『裁きの剣』よ、貫け！」

道具袋の収納口から剣を突き入れると、中から叫び声が聞こえてきた。

「よし、これでヒノモト城にいたすべての人間には現実世界に戻ってもらった」

「相変わらずえぐいよね」

容赦のないシンイチにメアリーはちよつと引いたが、すぐに気持ちを切り換える。

「ま、いいか。この世界からいつでも出られるようになるんなら、ボクもシンイチに付き合うよ」

他のメンバーたちも、次々とシンイチへの協力を申し出る。

「私も！ 私の仲間も救わないと！」

「私もお供しますぞ」

「……私も……」

メンバーを見て、シンイチがため息を漏らす。

「なんだか、デコボコしたパーティだな。まあいいか」

こうして、勇者シンイチ、魔王メアリー、変態貴族ドンコイ、シルフOSのセレントとツカナイ、以上、五人の勇者パーティはシルフを救う旅に出るのだった。



## シルフワールド——オリンポス城

『人神』たちの本拠地、オリンポス城では、『人神』たちがエリシオンの神々を迎撃するための準備を進めていた。

シルフを押さえることで、『人神』たちはシルフワールドで何でも実現することができる。世界そのものの設定を変えることさえたやすい。

『人神』のリーダー弘雅は、シルフを封じた魔法玉に触れて目を閉じていたが、しばらくして手を離すと、□元に笑いを浮かべてつぶやいた。

「ふう。これでシルフワールドはログインはできても、ログアウトできない設定になったぞ。エリシオンの神々が来たら、閉じ込めることができる」

「なるほど。あいつらがノコノコと来たところを一網打尽にするつもりか」

戦神アレスの分身、徳間栄人（とくま さいと）が剣を振りながら楽しそうに言う。

「でも、ログアウトできなくなって困る人も多いんじゃないかしら？ 無関係の人たちに迷惑をかけるのはちょっと……」

弘雅の側近である女神イシスは、一般ユーザーのことを気にかけていた。

「ま、そいつらには我慢してもらおうや。どうせ現実世界の一時間がこちらでは一日だ。ほんのわずかな間辛抱してもらうだけさ。今はこっちの世界で夜の十時だから、外の世界で本格的な騒ぎになるまでたっぷり時間がある」

「でも、人に危害を加えるようなことは……」

「しねえよ。んなことする意味ねえし。そもそも全員不死身じゃねえか。それに、この世界は現実と違って、何もかも思い通りに生み出せる。美味しいメシも都合のいいネーちゃんもな。気候は温暖で、体に疲れを感じることも病いで苦しむようなこともない。搾取も競争も意味がない。まさに天国ってやつだ。出られなくなったら不都合なんてないだろ」

弘雅はユーザーのことをどうにかするつもりは全くなかった。もちろん勇者シンイチのことさえ念頭にない。ただ神々を捕らえられれば、すべて終わりだと考えていた。

「搾取も競争もない天国……か」

そうつぶやきながらイシスは暗い顔をした。かつて彼女は、同じような理想のもとに世界を創造し、失敗していた。

「お前が言いたいことはわかるさ。結局俺たちは同じことを繰り返しているとも言いたいのだろう」

「そうよ……私たちは一体何のために、この地を訪れたのかしら……」

「すべて茶番さ。ともかく、俺たちの当面の敵はエリシオンの神々だ。それを倒してから次のこと



を考えよう」

弘雅はイシスに優しい顔を向けて静かに諭した。

彼も人間と神々が悠久の時の中で、同じことを繰り返しているとわかりつつ、とりあえずは前に進むしかないと考えていたのである。

「ええ……」

弘雅の言葉に、イシスは暗い顔をしたままうなずく。

「……さて、奴らはどう出るかな」

「怒ってこの世界に攻めて来るでしょう。この世界は私が以前創った『ユートピア』と同じで、所詮は幻の世界。この世界を支配したところで、あのときと同じようにいずれ潰されるかも……」

イシスが不安気に言うと、弘雅は自信たつぷりに笑みを浮かべた。

「心配するな。くくく……俺の野望は、こんな虚しい世界の支配に留まらない。俺の本当の目的は、神と人の間にいる我々『人神』が、真正正銘、本物の『神』になることなんだ」

イシスが、怯えたように疑問を差し挟む。

「そ、そんなことが本当に可能なのでしょうか？」

「心配するな。手はすべて打っておくさ。現実世界を映し出す『現世の鏡』よ。奴を呼び出してくれ」

弘雅が脇に立てかけられた鏡に呼びかけると、若い男の姿が映し出された。その男に弘雅は気安

く話しかける。

「ようデューク。ここまでは予定通り進んでいるぜ。そっちはどうだ？」

「準備中だ。今度こそ神々を完全に滅ぼしてくれる」

鏡に映った男は、大富豪にして投資家、そしてプロメテウスの転生者、デューク・神宅<sup>しんたく</sup>である。

彼は弘雅と手を組み、エリシオンの神々を滅ぼすという誓いを立てていた。

「期待しているぞ。策は二重三重にしておいたほうがいいからな。くくく……これからが楽しみだ」

弘雅は意地の悪い笑いを浮かべるのだった。

神々の住むエリシオンでは、ゼウスがイライラしながら弘雅からの報告を待っていた。しかし、いつまでたっても連絡がない。ついに痺れを切らして弘雅に呼びかける。

「いったいどうなっておるのだ！ シルフオリジナルを捕らえたまま、未だに消滅させておらんではないか。どういうつもりだ！」

通信用の鏡に向かって、怒声を浴びせかけるゼウス。しかし、受信した弘雅は余裕の表情を浮かべていた。

「まあそう言うな。こんな面白い世界を潰すなんてもったいなくてできないぜ。俺たち『人神』はこつちの世界でよろしくやっているから、これ以上構わないでくれ」

弘雅が神々へ決別を告げる。ゼウスは声を荒らげた。

「貴様！ 我が分身の分際で、ワシの命令に逆らうか！」

「ああ、逆らわせていただく。今更お前たち古い神々など何の力もないからな。それじゃ切るぜ」ゼウスが何か言い返そうとすると、そうする前に一方的に通信を切られてしまった。

「分身に裏切られるとは、無様だな……」

黒ずくめの服をまとった冥王<sup>めいおう</sup>ハデスが、鋭い口調でゼウスを責め立てる。自分たちが作った分身に反逆されるのは、神々である彼らのプライドを大きく傷つけていた。

「……やはり、我が直接攻めるべきだったのだ。たかが人間の創った世界、神の力をもってすれば簡単に破壊できよう。分身などに任せたのが間違いだった」

戦神アレスは隆々とした筋力を見せつけながら主張した。

「そう言うアンタの分身も裏切って、弘雅の下についているのよね。ふふふ、無様だわ。戦いばかりしている野蛮な男なんて簡単に裏切るのよ。私は分身を作らなくて本当によかったわ」

女神アテナが見下すような視線を向け、嘲笑する。

「なんだと！」

アレスが怒りに血相を変えて剣を抜くと、神々の間に緊張が走った。

ゼウスが白い髭を震わせて大声を出す。

「双方ともやめよ。今は争っている場合ではない。この際、我ら全員でシルフワールドに侵攻し、

分身ごとシルフオリジナルを消し去るべきじゃ」

神々は彼の言葉に賛同するように深くうなずいた。アレスも剣を収めて聞き入っていた。

「……わかった。『神甲』<sup>ジンガ</sup>装着」

アレスの声を合図に、神々の体が金色の鎧に包まれていく。いつの間にか、ペガサスに乗った神<sup>ジサウシヤ</sup>天士たちも現れ、彼らの前に整列している。

「よし!! では侵攻開始！」

ゼウスが大声を上げると、彼らの前に白い扉が現れた。神々はその扉を通って次々とシルフワールドに突入していく。

こうしてシルフワールドを戦場にして、本格的な戦争が始まるのであった。

神々が出現したところは、青い海が限りなく広がる太平洋の中心である。

「ふむ……。これが新しき世界か。悪くないな……」

さわやかな潮風にあおられて、海の神ポセイドンがつぶやく。どこまでも続く水平線に輝く海原が眩しかった。

「潰すにはもったいないくらいだな」

「たかが人間と精霊が創ったにしては、よくできておるわ」

数百年ぶりにエリシオンから出てきた神々は、シルフワールドの美しさに感動さえしていた。

「そんなことを言っている場合ではないぞ。我々はこの世界を滅ぼしにきたのだ」

そんな神々をペガサスに乗った軍神アレスが叱責する。

ドラゴン、グリフォン、ペガサス、ユニコーンなど、神々はそれぞれの騎獣に乗って空を駆け、弘雅たちのいるオリンポス城に向かっていった。

オリンポス城内の指令室では、さっそく神々の姿を捉えていた。

「シルフワールドにエリシオンの神々が出現しました。現在は太平洋上空を飛行しており、そのままこちらへ向かっています」

ヘッドセットを付けた『人神』が報告する。

「映像を出せ」

軍服を着込んで玉座に座る男——弘雅は不敵な笑みを浮かべる。

オリンポス城の外見は古風な中世の城だったが、その内部は近代の軍事施設のように造られていた。

先ほど弘雅に報告をした『人神』が手元のスイッチを押すと、空を駆ける神々の姿が巨大スクリーンに映し出された。

「ほう。これはファンタジー世界の住人にふさわしく、面白い生き物に乗っているな」

映像を見て弘雅は余裕たつぷりに笑う。

神々は、ドラゴンやグリフォンにまたがり、中世の騎士がつけるような甲冑に身を包んでいた。

「鎧なんか着てるな、あいつら……。何の意味があるんだろう。アホなんじゃない？」

シルフの力によって、老人のヘパイトスの姿から、元の美少年に戻っていた甲賀正仁こうが まさひとがつぶやく。「どうやらお馬さんにまたがって、剣や魔法をぶつけ合う戦いをしたいみたいだな。だが、それに付き合う義理はない。栄人、頼んだぞ」

「了解！ あいつらを例の兵器で殲滅せんめつしてやるぜ。ふふふ、自衛官だった経験がこんなところで役に立つとはな」

弘雅と同じように軍服を着た戦神アレスの分身、徳間栄人が敬礼して出て行く。

しばらくすると、オリンポス城の庭が開き、中から栄人の乗り込んだ巨大戦艦が現れた。

「空中戦艦『飛獄ひごく』発進！ 目的、神々の殲滅」

弘雅が戦艦に命令すると、『人神』たちは、大いに奮い立つのだった。

オリンポス城を攻め落とすべく、神々は進行中であつた。先頭に立つアレスの目に不可解な物体が映る。

「なんだ……？ 浮いているのは、山か？」

アレスがペガサスの上で首をかしげる。

空に浮いている奇妙な物体は、山とも岩とも形容しがたい巨大な構造物であつた。先端には大き

な穴が二つ空いており、不気味な空洞を覗かせていた。

「なんだあれは……？」

警戒してアレスは距離を取っていたが、巨大構造物から突き出た、いくつかの筒が一瞬きらめいたかと思うと……。

「な！」

爆音とともにミサイルが飛来し、アレスを直撃した。そして強烈な爆発が起こり、彼の体は木っ端微塵に碎かれてしまうのだった。

「な、なんだ？ 何が起こっているのだ？」

神々たちはひたすら動揺している。

神々の中でも最強の一人と言われていたアレスが、一度も剣を交えずに訳のわからないまま倒されたからである。

そうしてうろたえている間にも、次々とミサイルが飛来し爆発していく。神も<sup>ジ・サウルジャー</sup>神天士も神獣も関係なく爆発に巻き込まれている。

人間の騎士が何人かかっても返り討ちにできる伝説のドラゴンが丸焼きになり、その力を認めてエリシオンに迎え入れた、人間の英雄である<sup>ジ・サウルジャー</sup>神天士がなすすべもなく倒されていく。

人間の力などでは壊せないはずの無敵の鎧『<sup>ジ・シガ</sup>神甲』に身を包んだ神ですら、まるで虫けらのよう

に殺されている。

最初の攻撃を受けた時点で、およそ半数の神々が死んでいた。

「あ、あれは……」

さらにその飛行物体は、神との距離をどんどんと詰めてくる。

シルフワールドは想像力が力を持つ世界である。『人神』たちは持てる知識と想像力のすべてを費やし、この超兵器——巨大戦艦『飛獄』を造り出していた。

「しかし、こんなフネは現実ではありえないですね。神々も驚くでしょう」

女神イシスがつぶやく。

彼女の隣では、弘雅が玉座にふんぞり返っていた。

「ふふ。確かに現実にはありえないが、人間には想像力がある。だから、イメージすることによって『創造』できるんだ。エリシオンに引きこもってぼんやりと過ごしているだけの古い神々なんて、ただのボケ老人さ。遠慮なく撃て！」

弘雅の声に合わせてスクリーンに映る『飛獄』が、情け容赦なくミサイルを放つ。

「な、何が起こっているのだ！」

神々の軍団が破られて、ゼウスは呆然としていた。

テレビで人間の戦争を見たことはあったが、こうして実際に彼らの兵器の威力を目の当たりにするのは初めてである。

強力な現代兵器の前では、神々といえども全くの無力だった。

「くっ！ ならば直接あのフネを落とすのみだ！ 『メギドの火』」

へパイトスの手から赤い炎が発せられ、『飛獄』を包んだ。

「船など所詮は木でできたもの。一瞬で焼き尽くされるがいい」

高笑いするへパイトスだったが、すぐにその顔が驚愕<sup>きょうがく</sup>にゆがむ。

『飛獄』は確かに炎に包まれているものの、その船体には傷一つ付いていなかったのだ。

「ばかな、燃えないはずがない!!」

驚愕するへパイトス。

その光景を、船内のスクリーンで見ていた『人神』たちは、思い切り笑っていた。

「この船が木でできているとでも思ったのか？ 中世を通り越して古代の認識だな」

へパイトスの分身である正仁が大きく口を開いて嘲笑する。

「くくく……。この船はジェットエンジンにも使われている高融点金属モリブデンに改良を加えた合金でできていて、一万度まで耐えることができるんだ。たかが火であぶったくらいで燃えるものか。俺の本体のくせに馬鹿なやつだな」

正仁はこの船をイメージして造り出すために、現代兵器に使われている素材、構造を勉強し尽く

していたのである。

「ば、ばかな……。我ら神が『人神』ごときに敗れることなどあるものか……。世界を創り支配していたのだぞ……」

ゼウスの表情が絶望に染まる。

未知の現代兵器を使ってくる『人神』に対して、いにしえの武器しか持たない神々は対抗することができなかった。

「さて、覚悟してもらおうか。愚かな本体さんよ」

音声とともに映像が映し出される。声の主は、黒い軍服をまとった『飛獄』艦長、徳間栄人であった。

神々は怯え、いつせいに背を向けて逃げ出そうとした。

「くくく……。逃げられると思うなよ。準備はできたか？」

「エネルギー充填一〇〇%。いつでも撃てます」

射撃手の『人神』がニヤリと笑う。これから放たれる砲撃への期待で、『飛獄』に乗り込んでいた『人神』たちの興奮は最高潮に達していた。

分身の『人神』が、ついに本体の『神』を滅ぼすのである。

「よし。人類の夢と希望を乗せて、今こそ撃て！ 『神滅砲』<sup>しんめつほう</sup>」

栄人が高らかに声を上げ、手を振り下ろした。

轟音とともに主砲から白いビームが放たれ、一瞬にして神々がなぎ払われた。

その強烈な光によって船内は白一色に染まる。眩しさのあまり目をつぶった『人神』たちが再び目を開けると、スクリーンに映し出されていた空間には、雲一つない青空が広がるばかりであった。海上に目をやると、無数の棺桶がブカブカと浮かんでいる。その中に入っているのは、敗北したエリシオンの神々だ。

「よし！ 第一段階終了！ 洋上に漂う棺桶を回収せよ！」

弘雅の命令によりそれらはすべて集められ、オリンポス城に運ばれるのだった。

一方その頃、シンイチたちは、シルフを助け出す冒険に出ようとしていた。

セレントが、シルφος仲間からの情報をキャッチしてシンイチに伝える。

「シルφοςのマローンちゃんから連絡が入ったよ。シルフィールドおばあちゃんは、オリンポス城というところに捕らわれていたんだけど、マローンちゃんのパートナーの元治おじさんが助け出してくれたみたい。今は現実世界に帰っているよ」

今まで行方不明だったシルフィールドの無事を聞いて、シンイチは胸を撫で下ろした。

その後、マローンから敵の本拠地がそのオリンポス城だと聞き、シンイチたちはそこに向かうことにした。

メアリーが皆に声をかける。

「さて、それじゃシルフを助けに行くよ。『フライ』」

『女神の杖』を振りかざして呪文を唱えると、一行は空へ浮き上がった。

太った体を宙に浮かせたドンコイがニヤつきながらつぶやく。

「ふふふ。空を飛ぶのは、仮想現実とはいえ気持ちのよいものですな」

こうして勇者パーティ五人は、オリンポス城目指して飛んでいくのであった。

オリンポス城では、『人神』たちがエリシオンの神々を撃退したことに浮かれて、戦勝会を開いていた。

「今日は無礼講だ！ 神々を倒し、我々こそが真の神になった記念日だ。みんな楽しんでくれ！ 乾杯！」

弘雅が挨拶をすると、『人神』たちはグラスを掲げ、高級なワインを飲み干した。

「美味しい！」

「こんな高い酒、現世にいたときには飲んだことないよ……」

無骨な軍事施設然としていたオリンポス城内は、一瞬にして享樂的な雰囲気染まり、『人神』たちの饗宴の場と化した。

『人神』たちを陽気にしているのは、神を倒したことだけではない。シルフを押さえている限り、この世界ではどんなことでもできるという万能感が、彼らをさらに高揚させていた。

祝宴の際中に、『人神』たちは現世では満たすことのできなかった欲望を、思いのままに実現させていく。

「ははは、まさに天国だ！ 酒は旨いし飯は美味い。晴美も楽しんでるか？」

「もちろんよ。正仁くんと一緒にいるから……」

なぜか菅井晴美の姿をしたキャラクターが正仁の隣におり、彼はそのキャラクターを抱き寄せ悦に入っていた。この晴美は単なるデータにすぎないが、少なくともこの世界においては、正仁が思い描く最高に都合のいい女として確かに存在していた。

「おっと。Iカップのネーちゃんか。こりやすげえや」

弘雅が具現化させたのは、現実世界でよくグラビア雑誌の表紙を飾っていた、金髪巨乳のハリウッド女優である。彼はそのグラマラスなキャラクターに酒の相手をさせていた。

イシスが叶えた願いは、現実世界で失った我が子との再会である。

「加奈……もう離さない」

「お母さん……会いたかった……」

イシスと幼い女の子は、互いに強く抱きしめ合いながら、ともに涙を流すのであった。

こんな感動的な再会をよそに、現世で許されなかった凶暴な破壊衝動を存分に満たしている者がいた。

「ははは、ははは。死ね!! このゾンビどもが！」

このエキセントリックな欲望を叶えたのは、戦神アレスの分身、徳間栄人である。

彼は、人間だった頃から暴力が肯定される世界を夢見ていたのであった。今、彼がいる場所はシルフワールド内に創り上げられた小さな街。そこでは、ゾンビが大量に発生し、人々は武器を手に入ればサバイバルをしなくてはならない設定になっていた。

しかし、そんな夢のような時間は、突如として強制終了する。

『人神』たちが激しくクレームを言うなか、リーダーの弘雅は動じずに告げる。

「警戒させていたシルφοςから連絡が入った。どうやら敵のお出ましらしい」

敵と言われて、『人神』たちは首をかしげる。

シルフワールドの創造神であるシルフを押さえ、エリシオンの神々さえ駆逐した今の彼らには、もはや敵などいないはずである。

弘雅は一人苦笑を浮かべ、スクリーンを見つめていた。

『『反逆の勇者』 サマがシルフオリジナルを取り戻しに来たみたいだぞ。ふふふ、あの小心者の菅井雅彦の子供にしては、なかなか勇敢じゃないか』

現世での弘雅は、シンイチの父、雅彦の元上司であった。なにか因縁めいたものを感じた彼は笑みを深めた。

スクリーンには、オリポス城に迫る、シンイチとその仲間たちが映っていた。

映像の中で、オリンポス城の結界に直面したシンイチが叫ぶ。

「シルフを返してもらいに来た!! さつそく攻め込ませてもらうからな。結界を収納!」

シンイチが道具袋に手を入れて念じると、城を取り巻く結界が収納されてなくなった。その様子を見ても、弘雅は余裕の笑みを崩さない。

「ふふ、坊やは威勢がいいな。だが無駄なんだよ。結界発動」

弘雅がシルフの魔法玉に手を触れると、すぐさま結界が再生されていった。瞬く間に、オリンポス城は先ほどと同じように完全な結界に包まれる。

「くそ! もう一回だ!」

シンイチが何度も結界の収納を試みるも、そのたびに瞬時に結界を再生されてしまう。

「……どうしようか、これじゃきりがない」

城前まで来たというのに入城することができず、シンイチは呆然と立ちすくむのだった。

そんなシンイチたちを、弘雅は余裕の表情で見ていた。

「ふふふ……そろそろ飽きてきたし、勇者サマには現実世界にお帰りいただくとするか」

魔法玉に手を触れようとするが、寸前でその手を止める。

(待てよ……。こいつらを現実世界に追い返してしまえば、外で動き回って面倒なことになるかもしれない。奴が持つ『道具袋』はいろいろ応用が利くみたいだし……。むしろ俺が自由に手を下

せるシルフワールドの中で適当に遊んでもらったほうがやりやすそうだ。さて、そうと決まれば、時間稼ぎをしてやるか)

玩具を見つけた子供のように、弘雅は無邪気な笑みが浮かべる。そして、魔法玉に手を当て念じると、空中に巨大なシルフの映像が映し出された。

立体映像のシルフが、涙で瞳を潤ませながらシンイチに呼びかける。

「ここはどこ……シンイチ……助けて……暗いよう」

「シルフ! 大丈夫か!」

シンイチがシルフに駆け寄るが、映像なので触れることができない。

「なんとか魔力を振り絞ってこの映像を作ったけど……長くは持たないよ……。シンイチ、よく聞いて……。このオリンポス城の結界を解くためには、六人の神をシルフワールドから追い出す必要があるの……。神はシルフワールド中に散らばった六つの城に封印されているよ……。だから神を『裁きの剣』で貫いて……」

シルフの言葉に合わせて、空中にシルフワールドの地図が浮かび上がり、六ヶ所に赤い光が灯る。地球で言うところの北米、南米、オーストラリア、中国、エジプト、イギリスの位置である。

「お願い……私を解放して……」

最後にその言葉を残して力尽きたようにシルフの姿が消えた。

入れ替わりに、男の映像が現れる。



「ふふふ、そういうわけだ。はじめまして、『反逆の勇者』シンイチ君。俺たちにも反逆してみるかね」

その男の外見は中年といった感じだったが、妙な精気に満ちあふれていた。怒りに震えて、シンイチが大声を上げる。

「お前は誰だ！」

「この世界を統<sup>す</sup>べる『人神』の王、居永弘雅さ。くくく……俺たちに勝てれば、シルフォリジナルを解放しよう。そのためには六つの城を攻略してみたまえ」

「くっ……そうするしかないみたいだな……」

シンイチは齒<sup>は</sup>噛みしながら弘雅をにらみつけた。射るようなその視線に動じることなく、弘雅は冷淡に告げる。

「結構だ。だが、その道具袋の力は反則だな。封じさせてもらおう」

巨大な弘雅の映像から雷が放たれ、シンイチの手元の道具袋を直撃した。シンイチは一瞬うろたえる。

「うう……。いったい何をしたんだ」

「この世界のを消されてしまったては、こちらとしても困るんだな。消えたものが自動でリカバーするように、その袋のプログラムを書き換えさせてもらった」

弘雅の言っていることの意味がわからず、眉をひそめたシンイチは、道具袋を試してみることに

した。

「結界を収納！」

オリンポス城の結界は、一瞬にして消え去った。

が、すぐに再生されてしまう。結界が復活するのはさつきと一緒だが、今回は反応が即時であり、自動で再生が行われているようであった。

「そういうわけだ。シルフォリジナルを助けたければ、俺たちのゲームをクリアするがいい」

「わかった！ 必ずお前たちを倒し、シルフを助けてやる！」

弘雅の映像に向かって大声で言い放つと、シンイチは六つの城のうちの一つに向かうべく、その場を去るのであった。

勇者を見送った弘雅は、クスクスと笑い出した。

「ふふふ、所詮は子供。すぐに信じてしまうところが幼いな。おかげで簡単に追っ払うことができた」

万事が、弘雅の思い通りに進んでいた。

本物のシルフは、先ほどからずっと魔法玉の中で眠らされたままである。この状態では、指一本さえ自由に動かすことができない。つまり、先ほどのシルフの幻影は弘雅が作った偽の映像であった。

一連のやりとりを見ていたイシスが、呆れたように尋ねる。

「六つの城？ そんなものあるのですか？」

「ないな。だから今から造るんだ。適当に定番のイベントでも作って勇者君たちをあやしておこう。俺たちに必要なのは時間だからな」

そう言うと、弘雅は魔法玉に手を当て、世界各地に城を造り上げていった。そして、これから起こるであろうあれやこれやを夢想し、ニヤリと笑うのだった。

「……なるほど。勇者サマにはシルフワールドで踊ってもらい、その間に我々の目的を進めるということか。面白いな」

スクリーンに映し出されたデューク・神宅が笑う。

弘雅はオリンポス城の地下室に来ていた。そこには巨大なスクリーンがあり、現実世界と交信することができた。

またここには、カプセルが並べられており、その中にゼウスをはじめとするエリシオンの神々が封印されていた。神々の頭に被せられたヘルメットから情報が吸い出され、デュークの元へ送られ解析されていく。

弘雅が、自らの抜かりない仕事ぶりを誇るように告げる。

「神を捕らえることには成功したが、まあ、どうせこんな封印は長くは持たない。くくく、大人は常に二重三重の策を練っておかないとな。本当の目的達成のため、そっちもよろしく頼むぞ」

「わかった。俺たちの最終目的が達成されたら、シルフワールドも現実世界も必要なくなる。我々こそが本当の神になるんだ」

スクリーンを介し、二人は顔を見合わせて笑った。

彼らの計画はまだ始まったばかりだったが、成功に向けて確実に歩を進めていた。



シルフワールドにおいて現実世界のオーストラリアに相当する、オージーランド。その地にあるエアーズロックは魔物の宝庫であった。ここでは、ありとあらゆるモンスターたちが元気に暴れまわっている。

そんな危険な場所で、二人の女の子が狩りをしていた。

一人は、七色に輝くドレスを着た長い髪の少女——菅井晴美。もう一人は、犬の着ぐるみを被り、手に白い弓を持った少女——アンリである。

「勇者姉妹」と名乗る彼女たち二人は、最近急成長中の冒険者として、シルフワールドで有名になっていた。

「えい！ 『ハウンドアロー』！」

着ぐるみの少女の可愛らしい声が辺りに響き渡ると、何本もの光の矢がモンスターに突き刺

さった。

「やった！ ニードルカンガルーを倒しちゃった」

茶色い犬耳がピクピクと動き、尻尾が激しく振られた。

「やるね、アンリちゃん。次は私だよ。『魅惑のダンス』」

七色に輝く衣装から光がほとばしると、ニードルカンガルーたちはいきなり同士討ちが始め、大混乱になった。

「よし！ 『レインボーフラッシュ』！」

ドレスから放たれた七色の光が、混乱するニードルカンガルーを切り刻む。

アンリが歓声を上げる。

「ハルミお姉ちゃんもすごいよ。あつという間にぜんぶ倒しちゃった！ その『輝きのドレス』、完全に使いこなしてるね」

「ありがと。アンリちゃんも『白光の弓』をだいぶ使えるようになったね。うーん、気持ちいい。狩りつてこの世界ならでは遊びだね。運動にもなるし」

アンリと晴美がハイタッチする。

彼女たちが持っている武器は、ヒノモト城に実際にあった伝説の武器をモデルに作られていた。ちなみにシルフワールドで使いこなせれば、現実でも使えるようになる。すでに二人はそれぞれの武器のスペシャリストになっていた。

「あ、さっき倒したニードルカンガルーが『カンガルーの爪』を落としてる。なかなか珍しいアイテムだから、そこそこの値段になるよ」

キャッキヤと笑いながらドロップアイテムを集める二人。シンイチの妹たち二人はこの世界を心から楽しんでいた。

「でも、いきなりログアウトできなくなっちゃったね。キャロルちゃんとパフちゃんもいなくなっ  
たし……」

しばらく前からパートナーのシルフOSと連絡が取れなくなり、ログアウトもできなくなっていた。

「何かわかるかもしれないから、街に帰ってみようか」

「そうだね」

彼女たちは情報を求めて、エアースロックの近くにあるキャンベラに行ってみることにした。

さっそく冒険者ギルドに顔を出してみると、冒険者たちが噂話に華を咲かせていた。

「大帝グループをよく思わない企業がサイバートロを仕掛けたいぞ」

「スタート地点であるヒノモト国が壊滅したようだ。戻ってみてもNPCだけで、シルフOSも人間もいなかった」

詳しい話を聞くのは後にして、とりあえず二人は狩りの成果を換金することにした。

「ニードルカンガルーの爪二個ですね。四〇〇アルになります」

ギルドの受付キャラクターから代金を受け取ると、レストランへ向かい、二人は食事をしながら話し合いをはじめた。

「はあ。こっちのヒノモト国はなくなっちゃったって言ってたね。お兄ちゃんたちどこにいるんだろ。こっちに來てないのかなあ？」

サンドイッチを食べながら晴美がつぶやく。

「大丈夫だよ。お兄ちゃんならきつと何とかしてくれるよ」

そう言いながら、漫画に出てくるような骨付き肉をほおばるアンリ。どうやらあまり心配していないようだ。

「でもねえ。お兄ちゃんのはのんきだから、今頃現実のヒノモト国で寝ていたりして……。え？ 何この音！」

突然、大きな地響きが轟いた。

あわてて店から飛び出すと、エアーズロックのあった場所に巨大な城が出現している。

**巨岩城**  
六つの城を攻略し、とらわれの神を救え。さすれば世界から解放されん

城の上空に、大きな文字が浮かび上がっていた。

「これは……」

「なんだよ、こういうイベントだったのか。よし、俺らが達成してやるぜ！」  
空の文字を見て、色めき立つプレイヤーたち。  
アンリと晴美も「面白そうだ！」と期待に胸を膨らませるのだった。



### シルフワールド——アンゴルモア大陸

中華風の都市、中京の近くにも大きな城が出現している。

巨大な長い龍の形をした一本道の宮殿——万龍城である。

**万龍城** 六つの城を攻略し、とらわれの神を救え。さすれば世界から解放されん

同じメッセージが空中に浮かび、それを見た冒険者たちが湧き立っている。

そんな人々を尻目に、レストランでくつろぐ男とシルφοςがいた。

妖艶な金髪の美女のシルφοςが向かいの男に尋ねる。

「何か動きがあったみたいね。それでダーリン。あなたは参加するの？」

「くっただらねえ。ほっとくさ」

男は、周囲の状況に興味がないといった様子で一心不乱に中華料理を食べていた。

「ふふ。ダーリンらしいわね。でも、参加してイベントをクリアしないといつまでもこの世界から出られないんじゃないかしら。フリージア皇国陛下、カリグラさま」

カリグラのパートナーシルフOSであるモンローは心配している様子だったが、カリグラは全くく気にも止めていない。

「構わねえよ。やっと国王の仕事からも逃れたし、ここにはうるさい爺もいない。俺はしばらくこの世界に居座るぞ。旨い物食って、漫才見て、アニメ見て、漫画読んで、飽きるまでゴロゴロしてやるんだ！ 飯を食ったらネットカフェに行くぞ」

カリグラは、この世界で食べ尽くすことと遊び尽くすことにしか関心がなかった。

料理を口に頬張りながら、カリグラがモンローに話しかける。

「それじゃ、『知識共有』をしてくれ。今食った料理のレシピを覚えておきたいからな」

「はいはい」

モンローがカリグラとおでこをくっ付けると、カリグラの頭の中に知識が流れ込んできた。

「ふむ。北京ダックっていう料理だったのか。これは旨いな……。まったく、この世界は最高だぜ！」

カリグラはシルフワールドに来てからというもの、世界中の料理を食べ尽くし、その作り方を学んでいた。

このように遊んでいるようにしか見えない彼であったが、いずれは、フリージア皇国にさまざまな文化をもたらす、偉大な大王として讃えられることになる、というのはまた別の話――。



### シルフワールド——メリケン大陸

現実世界ではニューヨークに相当する場所に、大きな農村があった。

開拓村インディアナと名付けられたその村では、多くの人間が農作業をしていた。

ここでは、人々が種をまくとたった一時間ほどで成長して、色とりどりの花が咲いたり、美味しい果実が収穫できたりする。農業を楽しみたい人向けに大農園が広がっており、世界中の植物を育てることができた。

そんなのどかな村から少し離れたところに、何の前触れもなく巨大な樹が生えてきた。

「な、なんだ！」

農民の姿をしたプレイヤーたちが呆気にとられていると、メキメキという音を立てながら樹がさらに生長していく。

その樹は、あっという間に雲に達するほど大きくなった。

界樹城<sup>かいじゆじやう</sup> 六つの城を攻略し、とらわれの神を救え。さすれば世界から解放されん

空中に大きなメッセージが浮き上がる。

「これは……ログアウトできなくなったことに関係あるのか？」

「俺たちに参加しろってことかな？ でもここは皆が趣味で農業を楽しむ場所だし、冒険者なんかいないぞ」

「戦ったことなんかないしなあ」

巨大な樹を取り囲んでプレイヤーたちが話し合っている。

すると、不気味な羽音がして、巨大な樹から何かが飛び出てきた。

「痛い！」

「な、なんだこいつら！」

あわてて逃げ惑うプレイヤーたち。

それは成猫ほどの大きさもある巨大な蜂のモンスターだった。

「これは！ メガスズメバチ！ どうしてこんなところに！」

プレイヤーの一人が悲鳴を上げる。

メガスズメバチとは魔物として作られたキャラクターで、決められた生息域以外には絶対に現れないはずだった。

蜂たちは鋭い針を飛ばしてプレイヤーに襲いかかってくるが、戦ったこともないプレイヤーでは対抗できるわけもない。

平和だったインディアナの地に、悲鳴が木霊<sup>こだま</sup>するのだった。

「シルフからのデータだと、この辺に城があるはずなんだけど……」

シンイチは上空から見下ろして城を探していた。

彼らは、オリンポス城を取り巻く結界を破壊するために、六つの城を探して遠くメリケン大陸まで飛んできていたのだ。

「あれじゃないの？ 城っていうより樹だけど」

農村から離れた草原にぼつんとそびえ立つ巨大樹をメアリーが指さす。

「これが六つの城の一つか……。これを攻略したらいいんだな。よし、みんな行こう」

シンイチたちはその巨大な樹——界樹城を指して飛んでいった。

樹に近付くと、悲鳴が聞こえてきた。

「キヤー！」

「助けて！」

どうやら、巨大なスズメバチの大群が村を襲っているらしい。

「あれはメガスズメバチだな。生産職の人を攻撃しないようにプログラムされているはずなの

に……。なんで襲っているんだ？」

シンイチの疑問にセレントが答える。

「あいつらも操られているんだよ。シルフちゃんの力が乗っ取られた影響がここにも出ているみたいだね……」

「とにかく助けよう。『裁きの剣』よ、伸びろ！」

そう言ってシンイチが念じると、右手に握られた真っ白い剣が農村のほうへと伸びていく。

そして、その剣を振り回すと、あつという間に何十匹ものスズメバチが斬り刻まれた。

「やるねシンイチ。私もいくよ！『ウィンドレイン』」

メアリーが杖を振ると、無数のカマイタチが発生し、上空から一気に降り注ぐ。

無数の風の刃を受けたメガスズメバチの群れは、瞬く間にその数を減らしていった。

「きやああああ」

素朴な格好をした少女が、メガスズメバチに追いかけられ、必死になって逃げている。

「いたっ！」

石につまずいて転んでしまった。その隙を狙ってメガスズメバチが迫ってくる。少女は襲われる  
と思い、観念して眼をつぶった。

そのときである。

「むう。これはいけません」

聞き覚えのない妙な声がしたかと思うと、少女を守るように何者かが立ちはだかっていた。

「だ、誰？ 助け……え？」

少女は状況が理解できず、眼をパチクリとする。

もしかしたら白馬に乗った王子様が私を助けに来てくれたのかもしれない。そう思って、前に現れた人物を観察してみると……。

ブルマをはいた変態だった。あまりにも意外な姿に絶句する少女。

ブルマの救済者——ドンコイは勇敢に立ち向かう。

「私にお任せください。ぬん!!」

ドンコイは、いきなりブルマを下にずらした。

彼の後ろでその光景を見ている少女の目は、点になっている。

「くらえ！『吸光のち〇こ輪』」

股間から光の槍が雄雄しく立ち上り、メガスズメバチを串刺しにする。

彼が腰を振るたびに一匹一匹と死んでいき、やがてすべてのメガスズメバチが地面に落ちて  
いった。

紳士的な笑みを浮かべながら、ドンコイが振り返る。

「お嬢さん。大丈夫ですか」

可憐な少女は、顔を引きつらせて絶叫した。

「いやーーーーー変態！」

少女は、思い切りドンコイをひっぱたくのだった。

ドンコイが少女に平手打ちされている頃、シンイチたちは村人プレイヤーたちから感謝されていた。

「ありがとうございます」

「いえいえ、俺たちはシルフワールドの運営側の人間ですから、ユーザーを守るのは当然なんですよ。むしろ皆さんにはご迷惑をかけてしまい、本当に申し訳なく思っています。でも、もう大丈夫です。この『裁きの剣』で殺されるとログアウトすることができんですから。では、今すぐしましょうか？」

そう言うと、シンイチはすらりと『裁きの剣』を抜いてみせた。

しかし、プレイヤーたちはシンイチの「殺される」という言葉を聞いて怯えている。

「そ、そうですね……ログアウトする方法があるなら、今すぐでなくともいいですね」

「こっちに來てまだ二日目なので、現実だと二時間しかたつてないし」

そもそも彼らは、ログアウトできなくなっていたことも、あまり気にしていなかったらしい。

「いい機会だから、俺も城の攻略に挑んでみようかな」

そんなことを言うプレイヤーまで現れはじめる。

しかし、彼らの武器を見てシンイチが首を振った。

「でも、戦うといってもそれじゃあ難しいかも……」

生産職の彼らは、鍬や鋤、鎌といった農具しか持っていないかった。

「別に律儀に攻略しなくても、城ごと道具袋に収納すればいいんじゃない？」

メアリーがふと気がついたように言う。

「うーん、そっか。それじゃ、一応やってみようか。収納！」

シンイチはそそくさと界樹城に近づき、その大きな幹に触れて念じた。すると、巨大な樹木の城が一瞬で消える。

しかし次の瞬間には、元の場所に界樹城がそびえ立っていた。

「これは……」

「やっぱりね。さっき『人神』のリーダーに道具袋の設定を変えられて、収納したものが自動で再生されるようになったんだ。今の道具袋ではこの世界のものを消すことはできないよ」

それを聞いて、がっくりとうなだれるメアリー。

「待ってください。自動で再生されるだけなんですよね」

突然、ドンコイが声を上げる。

「ん？　そうだけど……」



「私に考えがあります。まず、その『裁きの剣』を地面に置いてください」

シンイチは怪訝な表情を見せながらも、ドンコイに言われたとおりに地面に剣を置いてみた。

「次に、道具袋に収納してください」

「はい。収納！」

シンイチが念じると、『裁きの剣』が一瞬だけ消えたものの、また同じように元の場所に再び現れた。

「ほらね。何度やっても同じなんだよ。道具袋にはもう『収納』できないんだ」

シンイチは寂しそうに笑うが、なぜかドンコイは興奮していた。

「いやいや、収納自体はできているのでは？ できないのは消せないことだけで。試しに道具袋に手を入れて、『裁きの剣』出ると念じてみてください！」

「え？ そうなの？ 『裁きの剣』出ろ」

シンイチが道具袋中を探してみると、確かに何かに触れた。それをつかんでおそろおそろ取り出す。なんと『裁きの剣』が出てきた。

「なんで？ どういうこと？」

「思ったとおりですね。道具袋に収納されたものが、自動で再生されるようになっただけなんです。袋にはちゃんと収納できる。これを上手く利用すればいろんなものが無限に増やせますぞ」

ドンコイは得意そうな顔をする。

「ふふ、ドンコイさん頭いいね」

「……さすがドンコイ。私のパートナー」

シルフォスのセレントとツカナイがドンコイを褒める。

「確かに。気がつかなかった」

「ドンコイ義兄さん、さすがだね」

シンイチとメアリーも思わず拍手した。

「よし、ここで全員の武器を増やそう。これで、この村人の武器の問題も解決だ！」

シンイチの『裁きの剣』、メアリーの『女神の杖』、そしてドンコイの『吸光のち〇こ輪』は道具袋に出し入れされて、量産されていくのだった。

シンイチは、大量に生み出された伝説の武器を村人たちに分け与えた。

「みんなに行きわたりましたね」

プレイヤーたちは、自分の好きな武器を選んで装備していた。男性はほとんどが『裁きの剣』を選び、女性は『女神の杖』を選んでいる。

「……なぜ私の武器を誰も選んでくれないのでしょうか」

ドンコイは誰も自分の武器を使おうとしないので、寂しそうにしていた。彼の目の前では、大量に売れ残った『吸光のち〇こ輪』がキラキラと輝いている。

「いや、それを身に付けるのはさすがに無理では……」

落ち込むドンコイを見て、気まずそうにするシンイチ。

ちなみに村人たちは、ドンコイが股間から輪を外すところもバッチリ見ていた。複製されたものとはいえ、誰も手をつけようとしなのは道理だった。

それでも、ドンコイは納得できないようで、自ら営業活動を始める。

「なぜです？ 持ち運びに便利で、敵を串刺しにできる強力な武器ですぞ。その方、お一つどうですか？」

「い、いえ、遠慮します」

ドンコイから『吸光のち○こ輪』を手渡されそうになった男性が、引きつった笑いを浮かべて去っていく。

「……ねえ、もういい加減に元の指輪に戻したら？ 元々そんな使い方が一般的な武器じゃないし」

メアリーが呆れたように提案すると、ドンコイは考え込んだ。

「確かに女性には装着できません。そうしましょう。では、シンイチ陛下、お願いします」

「わ、わかりました」

シンイチは嫌々ながら『吸光のち○こ輪』に触れて道具袋に収納し、サイズを縮めるように念じて、『吸光の指輪』に戻して取り出した。

すぐさまドンコイはその指輪を手にとると、先ほど自らが救った少女のもとに駆け寄った。

「では改めて。お嬢さん。その指にはめてあげましょう」

ドンコイはにこにこしながら少女の手に触れ、やさしく指輪をはめようとするが……。

「いや！ 変態……！」

少女は、再びドンコイを思い切り張り飛ばすのだった。



界樹城の入り口にシンイチ、メアリー、セレント、そしてその他の多くのプレイヤーが集まっている。

「よし。では、皆行きましょう」

シンイチの号令で、界樹城に入ってしまった。

中は当然ながらモンスターの巣である。さまざまな昆虫の姿を模したモンスターたちが容赦なく襲いかかってくる。

「えい！ 『ダークシェイク』」

メアリーが魔法を唱えると、黒い波動が通路いっぱい広がってモンスターの脳を破壊した。目の前にたくさんいたバツタのモンスターがまとめてなぎ倒されていく。